

公立はこだて未来大学 2015 年度 システム情報科学実習
グループ報告書

Future University Hakodate 2015 System Information Science Practice
Group Report

プロジェクト名

新しい函館のためのいかロボットの開発と運用

Project Name

New development and use squid robots for Hakodate

グループ名

グッズ広報グループ

Group Name

Goods and Information Publicity Group

プロジェクト番号/Project No.

4-B

プロジェクトリーダー/Project Leader

1013160 服部 辰 Akira Hattori

グループリーダー/Group Leader

1013140 新山健太 Kenta Niiyama

グループメンバ/Group Member

1013144 本部健太 Kenta Honbe

1013146 吉田雄 Yu Yoshida

1013195 蛭澤諒太 Ryota Ebisawa

指導教員

松原仁 鈴木恵二

Advisor

Hitoshi Matsubara Keiji Suzuki

提出日

2016 年 1 月 20 日

Date of Submission

January 20, 2016

概要

このプロジェクトでは、2016年3月に迎える北海道新幹線開業に伴って函館を盛り上げるために、いかロボットの新型、11号機を制作している。広報班の目標はtwitter、FacebookなどのSNSを用いてIKABOをもっと多くの函館市民に知ってもらい、全国の人々に知ってもらって函館を盛り上げたいと考えている。また、広報班はグッズを開発、販売してIKABOについて人々に興味を持ってもらうことと、このプロジェクトの資金面をグッズの売上で補うということも目標にしている。

キーワード 函館, 北海道新幹線

(※文責: 新山 健太)

Abstract

This project production new ikaroboto(The eleventh unit),because this project want to heap up Hakodate with the Hokkaido Shinkansen opening of business to reach in March, 2016. Aim of the public information squad is more Hakodate citizens know IKABO using SNS such as twitter, Facebook and I have people of the whole country know it and want to heap up Hakodate. And The public information squad develops goods and aims for supplementing having I sell it and be interested in people about IKABO and a fund side of this project for the sales of goods.

Keyword Hakodate,HokkaidoShinkansen

(※文責: 新山 健太)

目次

第 1 章	はじめに	1
1.1	背景	1
1.2	前年度までの成果	1
1.2.1	今までに販売していたグッズ	1
1.2.2	前年度制作したグッズ	2
1.2.3	前年度までの引継ぎ	2
第 2 章	課題の設定と到達目標	3
2.1	今年度の課題	3
2.2	到達目標	3
第 3 章	課題解決のプロセスと成果	5
3.1	グッズ販売	5
3.1.1	目的	5
3.1.2	概要	5
3.1.3	販売活動	5
3.1.4	新たなグッズ	6
3.2	SNS の公式アカウントの作成	6
3.2.1	目的	6
3.2.2	概要	6
3.3	クラウドファンディングの広報活動	7
3.3.1	目的	7
3.3.2	広報活動	7
3.4	次年度以降のグッズ案	7
3.4.1	目的	7
3.4.2	概要	7
3.4.3	制作活動	7
3.5	11 号機用のタブレットのインターフェース	8
3.5.1	目的	8
3.5.2	制作活動	8
第 4 章	他の班との連携による課題解決	9
4.1	製作班との連携	9
4.1.1	前年度の 11 号機	9
4.2	企画班との連携	9
4.3	イベントでの活動	9
4.3.1	イベントでの準備活動	10
4.3.2	販売・配布活動	10

4.3.3	アンケート	10
第5章	まとめ	11
5.1	成果	11
5.2	前期の反省	11
5.3	後期の反省	12
5.4	プロジェクトにおける自分の役割	12
5.4.1	新山 健太	12
5.4.2	蛭澤 諒太	13
5.4.3	吉田 雄	13
5.4.4	本部 健太	14
5.5	今後の展望	14

第 1 章 はじめに

1.1 背景

本プロジェクトは、函館市が抱える「観光客の減少」に対する問題をいかロボット（通称 IKABO）の制作を通じて解決することを目的として、市民有志らが 2005 年にいか IKABO の制作を本学に持ち込んだことから始まった。その後、IKABO の製作を目指す市民有志らによって「ロボットフェス・インはこだて市民の会」が発足した。IKABO の制作には本学を始め、函館工業高等専門学校や民間企業、前述したロボットフェス・インはこだて市民の会が参加し、函館の教育機関と企業の協力のもとで行われた。今までいかロボットは、1 号機を様々なイベントや花と緑のフェスティバルなどに参加させてきたが、2016 年 3 月の北海道新幹線開業に向けて新たにいかロボットの 11 号機の制作を計画し、新しいいかロボットの 11 号機を様々なイベントに参加させようと考えている。様々なイベントに参加して、今まで使っていたいかロボット 1 号機の約 2 倍程の大きさがあるいかロボット 11 号機を多くのイベントに参加させることによって、今まで函館市民が函館みなと祭りなどで何年も同じいかロボット 1 号機を見て「またこのロボットか。」などというマンネリを新しいいかロボット 11 号機をイベントに参加させることで新鮮感を持たせマンネリ化払拭し新しい、いかロボットの自動販売機約 2 個分という破格のスケールの大きさでインパクトを与え、「公立はこだて未来大学とロボットフェスイン函館市民の会はこんなすごい物を作っているのか」という印象を与えることができる。まずは函館新聞などの地方紙に取り上げられて函館市民の中のいかロボットの知名度を上げ、次に北海道新聞などの少し大きい地方紙に取り上げられ、北海道の中で函館と函館市の公立はこだて未来大学が注目され更に全国紙に取り上げられると北海道の函館市と、北海道の函館市の公立はこだて未来大学が注目されると考えている。更に他の方法でもいかロボットをもっと多くの函館市民、全国の人々に知ってもらい函館を盛り上げることを目標としており、新しいグッズの開発をしたり、すでに開発されたグッズの販売をしたり、今年度新たにアカウントを作成した twitter、Facebook などの SNS でいかロボットプロジェクトの活動内容の情報拡散や 11 号機制作の資金集めのための PR 活動をして新聞やイベントに参加していかロボットの知名度を上げるだけでなく、インターネットを用いて、SNS で学生自ら多くの人々にインターネット上でもイカロットを知ってもらおうとするなど、いかロボットの知名度の上昇のための計画及び活動を行っている。

(※文責: 新山健太)

1.2 前年度までの成果

1.2.1 今までに販売していたグッズ

昨年まで販売していたグッズにライト付きボールペン、缶バッジ、マグネット、ポスターカード、T シャツ、キーホルダーがあり、それぞれ多くの在庫が残してあることが確認できた。これらのグッズは一度も販売する機会のないものであったり、販売はしてみたものの売れなかったものである。新しく発注する必要がなく、これからグッズを販売する際にも使っていけそうな状態で

New development and use squid robots for Hakodate

あった。これらのグッズがなぜ多く残されているかの原因を追求していく必要もある。また、キーホルダーは昨年度のプロジェクトメンバーがレーザーカッターを用いて自主制作したもので販売目的ではなく、配布するグッズとして制作されたものである。

(※文責: 蛭澤諒太)

1.2.2 前年度制作したグッズ

前年度はキーホルダー、Tシャツ、マグネットの制作を行っていた。Tシャツとマグネットは実際に6月の花と緑のフェスティバルの際にブースを設けて販売を行うことができた。他にはイヤホンジャックのラフスケッチも行われていて、制作が検討されていたが、他のグッズ制作に時間を割いてしまい、制作を行えなかった。また、チャットアプリ LINE のスタンプの制作も検討されていた。

(※文責: 蛭澤諒太)

1.2.3 前年度までの引継ぎ

前年度のフィードバックでわかったことがマグネットや缶バッジのような手軽で安価なグッズが売れるという傾向だった。昨年に多くの発注を行っていたため、残っている在庫を今年度もイベント等で販売することができると確認した。昨年度制作されたTシャツは業者の発注ミスにより販売を行う機会に間に合うことが出来なかったため、今年度のイベントで販売してほしいと引継ぎがあった。また、Tシャツはロボットフェス・インはこだて市民の会会長からいただいた意見から前年度で制作を終了することとなった。

(※文責: 蛭澤諒太)

第 2 章 課題の設定と到達目標

2.1 今年度の課題

今年度の課題としては様々なものがあつた。まず一つ目は、いかロボットのこゝについて知名度がまだまだ低いことである。いかロボットは函館を盛り上げ、函館を PR することを目標にあるのだが、いまだに知名度は低い。函館以外に住んでいる人にも知名度は低いのだが、函館に住んでいる人ですらいかロボットのこゝを知らない人もいる。なので今年度の課題として函館やいかロボットの宣伝活動を行い、いかロボットの知名度を上げることが最重要課題と挙げられる。また、二つ目の課題として挙げられることは、今年度はイカロロボット 11 号機を制作する予定の年だったのだが、前期に行われた市民の会との会合で、いかロボット 11 号機の制作に関する資金が足りないということが分かった。本プロジェクトでは新しいいかロボット 11 号機を制作することに力を入れているのでグッズの制作する資金をいかロボット 11 号機の制作する資金にまわすため残念ながら今年度はグッズを作ることが出来なかった。そのため、グッズを制作することはできないが、来年度以降に引き継いでもらえるような新しいグッズの制作案を考へることや、新しい販路の開拓も課題にあげられる。現在、本プロジェクトではグッズの販売できる場所はイベントのときに限られる。たくさんのグッズを売するためには様々な場所でグッズを売れるように販路の拡大をするべきと考へる。以上より新しく作るいかロボット 11 号機やいかロボットのこゝについてもっと知名度をあげること、来年度以降に引き継いでもらえるような新しいグッズの制作案を考へることやグッズの販路を開拓することが課題に挙げられる。

(※文責: 本部健太)

2.2 到達目標

今年度はいくつかのグッズ案を考案し、うちわ、クラフト、ウェットのグッズのサンプルをイラストレーターで制作した。イラストレーターを初めて使ったときは、本プロジェクトにイラストレーターを使ったことがある学生がいない上に、デザインコースに携わる学生や先生がいなかったことからただ単に四角の図形を描いたりすることすらまもらなかった。だがしかし、だんだんとイラストレーターの扱いに慣れイカボのイラストやグッズ例を制作できるようになった。この 3 つのグッズ案を考案したが今年度は 11 号機制作の資金集めが主だったため、グッズの案を考案することはできたが、グッズ制作に資金を回すことができなかったためグッズを実際に制作という段階にまでは至らなかった。また、今年度は twitter、Facebook の二つの SNS でアカウントを制作しイカボの知名度上昇のための、いかロボットプロジェクトの活動の広報のための情報配信、11 号機の資金集めのために行っていた、クラウドファンディングの宣伝の二つを行った。広報のための情報配信に関しては多くの方に twitter のアカウントを「フォロー」してもらったり、ツイートを「リツイート」や「いいね」をしてもらい、また Facebook の更新も多くの人々に「いいね」してもらい広報のための情報配信に関しては成功したと言える。クラウドファンディングの宣伝に関しては宣伝した結果、期限までに目標金額に達することができなくクラウドファンディング自体は失敗に終わってしまったが、本プロジェクトの活動が新聞で取り上げられ、他の方法で 11 号機のための

New development and use squid robots for Hakodate

制作資金を目標金額まで集めることができた。

(※文責: 新山健太)

第 3 章 課題解決のプロセスと成果

以下の制作物の販売によって課題の解決を行なう。

3.1 グッズ販売

3.1.1 目的

IAKABO のグッズを制作して配布または販売する機会を多くの人が集まる場所で設けることで、少しでも多くの人々が IAKABO を目にかけることができ、IAKABO の認知度の向上につながると考えた。本プロジェクトの目的であるイカロボットを使って函館を盛り上げ、貢献するためにも IAKABO の宣伝は必要不可欠であり、それをグッズという形で IAKABO をアピールしていくことを目的とした。

(※文責: 蛭澤諒太)

3.1.2 概要

昨年度のグッズ制作班が作成したロゴを引き継いで、11 号機のロゴも作成した。グッズに統一したロゴがあることで目的である IAKABO の認知度の定着に大きく繋がり、本プロジェクトが制作したものであると目印にもなると考えた。昨年度から販売だけではなく、自作キーホルダーのようにイベント参加者に配布できるグッズを制作することで、いかロボットに興味のない人にも受け取ってもらいやすく、目的の達成とグッズの売上にもつながると考えた。今までは一番認知度の高い IAKABO1 号機がデザインされたグッズがほとんどであったが、今年度完成される新しい IAKABO11 号機がデザインされたグッズを制作していくことで 11 号機を盛大にアピールしていくこととした。

(※文責: 蛭澤諒太)

3.1.3 販売活動

イベントでグッズを売る活動を行った。主なイベントは前期に行われた「花と緑のフェスティバル」である。イカボの操作体験を行って頂いた方にイカボグッズの販売も行っていることを伝え、グッズを勧めた。「花と緑のフェスティバル」の来場者のうち、イカボの操作体験を行って頂いた方のほとんどが小学生以下だったため、グッズを強く勧めることは難しかった。しかし親子連れの方には積極的にグッズを勧め、グッズを買って頂けるように努めた。夏休み中に行われた札幌の地下歩行空間でのオープンキャンパスではグッズも持参したが、イベント自体のターゲットが高校生であり、「花と緑のフェスティバル」とはイベントの狙いも趣旨も違ったためグッズを売ることはほとんどできなかった。これまではイベントでしかグッズを販売してこなかったため、グッズを売ることでの利益はイカロボット 11 号機の予算に全く足しにならなかった。今後は駅のお土産屋に置いて貰えるように販路の拡大をすることで、グッズの利益を大きくしていけるように工夫するこ

とも課題である。

(※文責: 吉田雄)

3.1.4 新たなグッズ

今年度は新たなグッズをいかロボット 11 号機の制作資金が不足しているため制作するまでいかなかったが新たにグッズの制作案を考えることにした。まず、いかロボット 11 号機の制作や概要について PR するために港まつりで配布する予定だったうちの制作について考えた。制作する予定だったうちではデザインをいかロボット 11 号機にすることでいかロボット 11 号機の PR を狙った。そのためにイラストレーターを使っていかロボット 11 号機のロゴやデザインをすることで始まった。最初は慣れないイラストレーターだったが使っていくうちに徐々に使えるようになっていった。その結果、新しいいかロボット 11 号機のロゴを完成させることが出来た。また、港まつりなので夏っぽいデザインにしようと考えた。たくさんの意見を出し合ったが、最終的に花火をモチーフにしたデザインに決まった。花火と作製したいいかロボット 11 号機のロゴを合わせることで港まつりの中でいかロボット 11 号機を宣伝できると考えた。あとは制作するのに必要な資金や発注する会社などを選んだが、上記でも述べたように制作資金が不足していることが分かったので制作するまでには至れなかった。その他に新しいグッズとしてペーパークラフトやウェットティッシュである。ペーパークラフトはいかロボット 11 号機をペーパークラフトにすることで若い人への販売を狙った。紙で作るために原価も安く、手頃な値段で買えるからである。昨年までのグッズの販売状況や在庫を見ると比較的値段の高い T シャツや、ボールペンはあまり売れてないように思えた。T シャツやボールペンの在庫はたくさん余っているのだがマグネットや缶バッジのように安い商品はたくさん売れている。そのためにユーザーが購入しやすい値段が手ごろなグッズを制作しようと考えた。ウェットティッシュも原価がとても安く、またいかロボット 11 号機のデザインやロゴをいれることでいかロボット 11 号機の宣伝効果を狙えると考えた。たくさんのグッズの制作案やデザインを考えたのだがどれも制作することが出来なかったのが非常に残念である。しかし、このように色々なコンセプトで新たなグッズの制作案を考えることが出来た。

(※文責: 吉田雄)

3.2 SNS の公式アカウントの作成

以下の SNS 公式アカウントの作成によって問題解決を行う。

3.2.1 目的

SNS を活用しイカボの知名度を上げても多くの函館市民や北海道の人々、全国の人々に知ってもらい、まずは函館でのいかロボットの知名度、北海道でのいかロボットの知名度、そして全国でのいかロボットの知名度を上げること、また Readyfor 株式会社様でさせていただいていた、クラウドファンディングの活動を知ってもらうことを目的とした。

(※文責: 新山健太)

3.2.2 概要

2つのSNS、twitter、Facebookでアカウントを作成し、twitterのツイート、Facebookの投稿でイカロロボットプロジェクトの活動内容のPR、公立ほこだて未来大学のイカロロボットプロジェクトの学生がクラウドファンディングを行っていることの宣伝を行った。

(※文責: 新山健太)

3.3 クラウドファンディングの広報活動

3.3.1 目的

クラウドファンディングのWebページに掲載されているだけでは多くの支援をもらうことができないのではないかと考え、SNSを用いてクラウドファンディングで支援を募っていることを広報し、さらに多くの方に見てもらい成功率を上げようと考えた。

(※文責: 吉田雄)

3.3.2 広報活動

Twitter、フェイスブックを用いてクラウドファンディングの広報の他に日々の活動やイベントの告知、またグッズの広報活動を行った。多くの人の目に留まるよう、こまめに更新を続けた。さらに不特定多数の人に見てもらえるよう、TV局の公式アカウントや芸能人やロボットファンの方などを多くフォローし、発信していくことで様々な反応をいただくことができた。

(※文責: 吉田雄)

3.4 次年度以降のグッズ案

3.4.1 目的

次年度、イカボ11号機が完成する予定であるため、イベントなどに参加することが見込まれるため活動資金が必要が必要で考えられる。そこで次年度の学生がすぐにグッズを制作しすぐに販売し、活動資金の充てにできるように制作した。

(※文責: 新山健太)

3.4.2 概要

今年度は資金不足により、グッズにお金が回らなかったことでグッズの制作を行えなかった。次年度以降にグッズの制作に早く取り掛かることができるよう、今年度のうちにグッズ案を考えた。

3.4.3 制作活動

今年度は制作することができなかつた新しいグッズを考え、次年度以降に引き継いでもらえるよう考えた。班員全員で意見を出し合い何を作るか考えた結果、うちわ、キーホルダー、ステッカー、ペーパークラフトなどが上がり、今年度はこの新しいグッズのデザインも班員全員で話し合った。

(※文責: 吉田雄)

3.5 11号機用のタブレットのインターフェース

3.5.1 目的

制作班が11号機の制作で負担が大きいため、グッズ班で11号機のインターフェースを制作し制作班の手助けをすること。

(※文責: 吉田雄)

3.5.2 制作活動

11号機のインターフェースの制作にあたり、最初にペイントを用いてデザインを大まかに考えた。1号機のインターフェースから大きくかけ離れず、従来のものより使いやすくわかりやすいデザインにするよう考えた。その結果、画面左半分をキネクト画面にし、右半分を手動操作モードの動作選択画面を置くことで見やすく且つ使いやすい画面になると考えた。制作には11号機の制御にも用いているプロセッシングを使用した。考えたデザインのものと同じようにプロセッシングで作成し、右半分の画面はアイコンを縦スクロールで選択できるような仕様にした。以上のようにインターフェースをプログラミングし、制作班に引き継いだ。

第 4 章 他の班との連携による課題解決

4.1 製作班との連携

製作班からの依頼で 11 号機のために新しく使用する、タブレットのアプリのインターフェースをグッズ、広報班で制作した。最終発表でイカボ 11 号機は完成していなかったのにイカボ 11 号機はなかったが、実際にタブレットを操作し実演した。

(※文責: 新山健太)

4.1.1 前年度の 11 号機

前年度の 11 号機に関しては、作成図のみだった。その作成図を用いて今年度イカボを制作していただく株式会社コムテック様に提出した。

(※文責: 新山健太)

4.2 企画班との連携

企画班が計画するイベントにおいて、グッズ広報班ではグッズの販売を行った。企画班がイベントの運営を行い、グッズ広報班はグッズの販売や接客をするという役割を分け合うことでより効率的なイベントの運営を行えた。またグッズの販売を通じて新たな課題の発見と解決が行なえると考えている。現時点では、グッズ班、企画班ともに案が固まっておらず販売等につなげるところまでは至っていない。また、連携することによりイベントに適した、より売れる親しみやすいグッズの制作案を出していった。そして企画班とグッズ広報班が連携をとりあうことでグッズの販路の拡大を狙えると考えている。

(※文責: 本部健太)

4.3 イベントでの活動

前期に本プロジェクトで参加した花と緑のフェスティバルではプロジェクトメンバーが観覧者に、イカボの実演、イカボに説明している様子を動画や写真に収めた。またその時期にはまだグッズ制作に取り組めなかったため、昨年度以前に制作したグッズを販売した。また企画が人々に発表している様子を動画や写真に収め保存した。その花と緑のフェスティバルに参加し終えたあとのプロジェクトの活動の時間に撮影した発表風景を見て自分たちの発表がどんな点がよかったか、どんな点がよくなかったなどと考える時間を設け、話し合いを行った。

(※文責: 新山健太)

4.3.1 イベントでの準備活動

花と緑のフェスティバルに向け、話し合いをした結果、昨年度で在庫が大量に余ったポストカードを来訪者に無料で配ることにした。また 2014 年度の T シャツ、2013 年度の T シャツ、ペンライト、マグネット 5 種類の在庫を前日までに把握し、また花と緑のフェスティバルの後に在庫の確認をおこなった。

(※文責: 新山健太)

4.3.2 販売・配布活動

昨年度で在庫が大量に余ったポストカードを来訪者に無料で配った。また 2014 年度の T シャツ、2013 年度の T シャツ、ペンライト、マグネット 5 種類をそれぞれ売ることができたが思っていたよりは数多く販売することができなかった。無料配布したポストカードは特に子供たちにウケが良かった。

(※文責: 新山健太)

4.3.3 アンケート

後期ではイベントを行うことが出来ず、アンケートを取る事が出来なかった。そのためアンケートによる課題の発見や解決、フィードバックを見つめなおすことが出来なかった。

(※文責: 本部健太)

第 5 章 まとめ

5.1 成果

twitter や、FaceBook などの SNS で広報活動をした結果 twitter のアカウントをフォローしていただいたり、FaceBook のページの新規ビューをしていただいたり今まで多くの人々にいかロボットプロジェクトについて知っていただいたことができたと思う。また実際に新聞の、いかロボット 11 号機の資金が足りないという記事を見ていただいて 300 万を寄付していただいた。クラウドファンディング自体は失敗という形に終わったが資金集めという活動としては成功したと言え、今年度の子広報活動は成功したと言える。

(※文責: 新山健太)

5.2 前期の反省

前期の活動に関しては、一つめにグッズの作成に関してである。いくつかグッズ案を作成したが、11 号機製作の資金が不足しているために新しいグッズ製作に資金が回せないために新しいグッズを製作することができなかつたことが反省点である。11 号機に製作資金が学生の力だけでどうにかできる金額ではなかったが本プロジェクト全体で考えると、新しいグッズを一つも作ることができない経済力であったと考えると本プロジェクト全体の反省点だったのではないかと考える。来年度はいかロボットの新型、いかロボット 11 号機の制作のための資金が集まっており、グッズ制作にも資金を回すことができるため来年度のいかロボットプロジェクトのグッズ広報班の学生には今年度制作したグッズ製作案や、来年度のいかロボットプロジェクトのいかロボットプロジェクトの学生自身が考えるグッズ製作案を用いて今年度製作できなかった分多くのグッズを製作してほしい。二つめに、前期に本プロジェクトで参加した、「花と緑のフェスティバル」でグッズ販売を行った。本プロジェクトに発表を見てくださった人々にポストカード約 100 枚を無料配布し、そのポストカードは全てを配布することができたが、グッズ販売した、2013 年度に製作した T シャツ、2014 年度に製作した T シャツ、ライト付きボールペン、マグネット四種類をいくつか販売することができたが、多くの在庫を余してしまい私たちグッズ広報班が金銭的な意味で直接 11 号機の制作のための資金に貢献することができなかつたことがもう一つの反省点である。なぜグッズをたくさん販売することができなかつたのかを考えると、販売しているときにお客さんにどのように販売しているグッズに興味を持ってもらうこと、また絶対売るという積極性が足りなかつたのではないかと考える。三つめにグッズの制作案に関してである。いくつかグッズ案を考案したがこういうグッズを作ろうというコンセプトがなく納得いく案を制作することができなかつた。そのためいくつかのグッズ案を考案したがこれといった案が出来上がらなかつた。良いグッズを制作するには、おおまかにこのようなグッズを制作しようや、適当にこのようなグッズを作ろうとなどのように大まかな範囲の考え方で制作しようとするのではなく、テーマやコンセプトをきちんと考えて考案すべきであると思う。来年度のいかロボットプロジェクトのグッズ広報班の学生にはきちんとこのようなグッズを作ろうというコンセプトやテーマをきちんと持ってグッズの考案をしてほしい。

5.3 後期の反省

前期に引き続きグッズの制作についてはイカロロボット 11 号機の制作費の関係でグッズの制作の費用に回せる金額が不足していたため見送りになった。グッズは制作できないがたくさんのグッズの制作案を出し合い、新しいグッズのコンセプトを考え、グッズを制作する準備は万全だった。しかし、グッズを制作することに踏み込めなかったことが反省点の一つである。また、制作案を出したはいいが、よりもっと具体的な案や曖昧だった部分をきちんと話し合い改良していけばよりよいグッズの制作案を出せたのではないかと考える。また、もう一つの反省点は今残っているグッズの在庫を売りさばけなかったことである。後期は主にイベントなどなかったのだが、イベントのときだけではなく様々な場面でグッズを販売するべきだったと考える。そのためにも販路の拡大に力を入れるべきだったと考える。積極的に販売させてもらえる場所を模索しコンタクトをとり販路の拡大をすればよりグッズを売れたのではないかと考える。現に最終発表のときに「グッズはどこで売っているのですか」「グッズがずっとほしかったのだがどこに売っているかわからない」というような声があった。確かにグッズはイベントのときにしか売っていなかったのでイベントに来た方しかグッズを買うことが出来なかった。そのフィードバックを経て、やはり未来大学の購買やたくさんの人が行き交う函館駅のお土産コーナーに販路の拡大を考えるべきだと反省した。また、人気のグッズはインターネット販売を始めてみてはどうかと考えた。そのようにすればユーザーが手軽にグッズを買うことが出来るからである。しかしながらインターネット販売を考えたと具体的な行動に移せなかった。来年度のプロジェクトではぜひこのインターネット販売を実現させてほしいと考える。そして最後にロゴやデザインについてである。自分たちが主に使用していたロゴやデザインは去年のプロジェクトの人が作ったものを改良して作ったものであり、完全なオリジナルのものは作っていない。なので反省点の一つとして自分たちで完全にオリジナルのものを作りたかった。今のロゴは機械的すぎるのもっと市民の方々が親しみやすいようなデザインや可愛いロゴを制作したいと考えた。本年度のグッズ広報班では制作までにいけなかったので来年度のプロジェクトのメンバーには親しみやすさなどを考えて制作してもらいたいと思っている。

(※文責: 本部健太)

5.4 プロジェクトにおける自分の役割

5.4.1 新山 健太

グループリーダーとして、メンバーの進行状況の確認及び作業の効率化、また作業の振り分けをした。更に昨年からのグッズの販売、売上の集計も行った。プロジェクトで参加した花と緑のフェスティバルでは実際にグッズの販売を行った。実際に販売を行った結果、マグネットが5種類、ライトボールペンはいくつか売ることができたが、T シャツを、1枚も売ることができなかったのが反省点の一つである。またイカが自体を見てもらってからグッズの販売をしているという紹介をしようと思ったのだがわざわざいかロボットのショーまで聞いてもらったのに、グッズを買ってほしいというアピールをするのがもう一つの反省点である。後期に他のイベントに参加するができればグッズを売るという意識を強くしてグッズを販売したい。またもし仮に、いかロボットが今より

有名になったら空港や駅、観光地などの観光客が集まりやすいところにイカボグッズを置かせてもらって販売したいと思っている。またいかロボット 11 号機のイラストを作成した。11 号機のイラストは色々な人が親しやすいデザインにした。

(※文責: 新山健太)

5.4.2 蛭澤 諒太

私は主にグッズの制作案を行った。今年度はイカロボット 11 号機が完成されるので、企画班とも話し合いをしてイカロボット 11 号機を前端的に売り出していくと決めた。したがって今後制作するグッズにはイカロボット 11 号機のイラストを取り入れたグッズを考案し、新しいイカロボットに親しみを持ってもらうということを目指して制作活動をした。花と緑のフェスティバルまでにグッズを制作するのは発注や商品が届くまでの時間を考えると間に合わなく、前年度までで制作されたグッズの販売をそのイベントで行ったが、相対的ではあるが、マグネットの売れ行きはよかった。前年度のフィードバックからも安価で手軽なグッズが手に取ってもらいやすいということがわかっていたので、一番のテーマにしてグッズの考案を行った。また、このイベントにおいて 100 枚ほどあったポスターカードを全て無償で配布することに成功し、イカロボットのアピールにつながった。一つ目のグッズ制作としてみなと祭りに向けて、先ほど挙げたテーマや季節も含めて、うちわを制作することに決めて、デザインを前年度のプロジェクトのメンバーが制作したロゴやイカロボットのデザインを参考にして行った。初めて使う Illustrator を試行錯誤し、イラストの考案をした。制作途中でグッズ制作資金が足りないことが判明したため、制作は打ち切りになってしまった。他にもステッカー、キーホルダー、配布用のグッズとしてペーパークラフトの制作を試みようとしていた。グッズを制作できなかったのは残念ではあるが、今年の経験や昨年までの引継いできたものを来年度以降のプロジェクトメンバーに引き継いで、今後はグッズを販売する機会や販路を増やしてイカロボットのアピールをして、グッズをたくさん売ってアピールしていきたい。マンネリ化を払拭するために多大な資金と労力が新しいいかロボット 11 号機にはかかっているのがこの一年で大いに理解したので、今後 11 号機を使ってこのプロジェクトや関係者の方々も含めて成功していくために、グッズ広報班はグッズや SNS を使って、まずは函館市を中心にアピールしていく必要がある。

(※文責: 蛭澤諒太)

5.4.3 吉田 雄

私はイベントなどでのイカロボット及びイカロボットグッズの販売を行った。札幌で行われたオープンキャンパスや企業説明会に参加し、イカロボットの PR の活動をした。これらのイベントはグッズの販売が目的のイベントではなかった為、グッズの販売は行わなかったが、イカロボットの PR を積極的に行った。前期に行われた「花と緑のフェスティバル」に参加した際には、1 号機の操作体験の横で積極的に来場者にグッズを勧め、グッズを売ることができた。Twitter とフェイスブックの公式アカウントの PR を行い、新幹線の開通に関する説明や新しい 11 号機の説明もし、来場者の多くにイカロボットを知ってもらうことができた。また、クラウドファンディングの終了後にも SNS を用いて日々の活動報告を行うことでイカロボットプロジェクト自体を多く知ってもらうことができた。制作班から依頼のあったインターフェースの制作も行った。11 号機のイ

New development and use squid robots for Hakodate

インターフェースの制作にあたり、最初にペイントを用いてデザインを大まかに考えた。1号機のインターフェースから大きくかけ離れず、従来のものより使いやすくわかりやすいデザインにするよう考えた。その結果、画面左半分を11号機の新機能のキネクト画面にし、右半分を手動操作モードの動作選択画面を置くことで見やすく且つ使いやすい画面になると考えた。従来のインターフェースを使った際、アイコンが見にくいことや、タッチした場所にイカボの画像が現れるといった必要の無い仕様を新しいインターフェースでは改善できたと感じた。インターフェースの制作には11号機の制御にも用いているプロセッシングを使用した。考えたデザインのものと同じようにプロセッシングでプログラムを作り、右半分のアイコン選択画面はアイコンを縦スクロールで選択できるような仕様にした。以上のようにインターフェースをプログラミングし、制作班に引き継いだ。また来年度以降のグッズの制作の手助けになるように新しいグッズの案をあげ、デザインの考案をした。新しいグッズとしてはうちわやキーホルダー、ペーパークラフトなどが挙げられた。今年度は残念ながら予算のほぼ全てがイカボ11号機の制作にあてられたため、新しいグッズの制作はできなかった。来年度以降に予算に余裕ができた際、グッズ制作の手助けになるようにグッズのコンセプト、デザインの考案や、単価などの下調べも行った。

(※文責: 吉田雄)

5.4.4 本部 健太

私は主に SNS やイベントでのイカロボットの広報活動、グッズの制作案について積極的に活動してきた。SNS では逐一イカロボット11号機のことやイベントの情報を発信することによってイカロボットのことを知ってもらうことが出来た。目標としては3月に行われる新幹線開通イベントに向けて新しいイカロボットの開発に伴って、イカロボットの知名度を上げ、たくさんの人にイカロボットのことを知ってもらえるようにすることである。その他に、新しいイカロボット11号機制作について制作する資金が不足しているためにクラウドファンディングを行い、そのことをより多くの方々に知ってもらうことである。その為の媒体としてグッズの販売や SNS 等による広報活動を行っている。その目標に沿って SNS による広報活動に力を入れ、イカロボット11号機の PR 活動をした。イベントでは来場してくれた方に11号機を制作することについてや概要、11号機の機能を説明することで新しいイカロボットのことを知ってもらうことができた。グッズの制作に関しては残念ながら、11号機制作の費用の関係でグッズを制作できなかったため、来年度引き継いでもらえるように様々なグッズの制作案を出していった。始めはデザインコースの人が一人もいないためイラストレーターを使えるものがなく、皆でイラストレーターを使えるように勉強するところから始まった。勉強したおかげもあり、なんとかイラストレーターを使えるようになりロゴの制作やグッズ案のデザインやポスターを作るのに役立てることが出来た。制作案として考えたものはよりコストがかからない、より市民の人々が親しみやすいグッズである。今のロゴは機械的なため親しみやすさに欠けている。そのため、可愛らしいロゴや原価の安いグッズを考えていった。グッズの制作は出来なかったものの、新しいグッズの制作案やロゴの作成、新しいグッズに使えるデザインの作成などに力を入れてきたので来年度のグッズ広報班にはぜひ僕たちが作ってきたものや本年度のプロジェクトで学んだものやフィードバックを生かして引き継いでほしいと思っている。

(※文責: 本部健太)

5.5 今後の展望

今後の活動としてはイカロボット11号機の制作について力を入れていこうと思っている。本プロジェクトではイカロボット11号機を制作し新幹線開通イベントに間に合わせ、イベントに出ることが目標である。そのためにもプロジェクトのメンバー全員が一丸となって制作に取り組むことが必要となってくる。また、今年度はグッズを残念ながら作ることが出来ていないので、出来れば残り時間が少ない中で作成できるグッズがあれば作成したいと考えている。その他に来年度に引き継いでもらえるようなグッズの作製案を考え、来年度にその制作案を引き継いでもらいグッズの作成に役立ててほしいと考えている。

(※文責: 本部健太)